地域みらい留学フェスタ2019 報告レポート

【主催】
（一財）地域・教育魅力化プラットフォーム
地域みらい留学推進協議会

【共催】
島根県教育委員会

【後援】
内閣府、総務省、文部科学省

Supported by 日本財団

地域・教育魅力化プラットフォーム
日本財団 THE NIPPON FOUNDATION
内閣府 総務省 文部科学省

ごあいさつ

「高校時代、地域へ留学する」ことが強い意志を育む

右肩上がりの経済成長を続ける社会から、先行きの見えない時代へ。社会は私たちの想像をはるかに超えるスピードで変化しています。そんな時代を生きてゆくこれからの子どもたちには、自分たちの力で未来を切り拓いていこうとする強い意志が求められています。

そのためには、社会への感度が上がる高校時代にどれだけ社会と接する機会を持ち、地域の未来を自分たちの手でつくる原体験を積み上げることができるのかが重要です。

地域には様々な挑戦を受け入れてくれる環境が存在します。親そして先生以外の大人たちに囲まれて、切磋琢磨する機会も少なくありません。私は1人の親として、島根県海士町で目にした恵まれた教育環境に魅了されました。

何かに挑戦する意志を育み、そして実際に行動する。成功しても失敗しても、そこには喜びや悔しさを感じる瞬間で溢れています。そうした感情をバネにして、再び挑戦する。これこそが生きるということではないでしょうか。

28 年間、リクルートで意志ある若者を育むことに全力を投じてきました。そして、これからは地方の教育現場から、1 人でも多くの子どもたちに意志を育む機会を届けていきます。

少子高齢化社会、地方から都会への人口流出…取り組まなくてはならない課題は山積みです。ですが、私はこれからの社会を悲観するのではなく、子どもたちが切り拓く未来に希望を抱いています。

地域で育った子どもたちが地域の、日本の未来をつくっていくと信じています。

一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム　代表理事

水谷智之

地域みらい留学について

「地域みらい留学」とは

都道府県の枠を越えて、地域の学校に入学し、充実した高校3年間をおくること。

どこで	誰と	何を
多くの課題を抱えた地域という 世界の先進地で	立場や世代を越えた 多様な人々と	実社会の縮図体験となる 3年間を過ごす

なぜ今、「地域みらい留学」なのか?

日本社会の変化

1 少子高齢化と人口減少

2060年には、日本の人口は現在の3分の2(約8700万人)へ。超高齢化社会による労働力人口減少の課題も抱えている。

2 急激な社会の変化

財政赤字、競争力の低下、医療や年金などの社会保障制度、子育て、女性の社会進出など、日本にはこれから解決すべき課題が山積み。

3 2020年度から大学入学共通テストが開始

「主体性を持って多様な人と協働して学ぶ態度(文部科学省)」を育てるため2020年度から新しい大学入試が実施。

こうした正解のない世界を生きていくために、

自分の意志で挑戦を続け、自ら未来をつくる力 が求められる!

課題解決先進地である日本の地域には、挑戦の機会が溢れています。

「地域みらい留学」の魅力

新たな友達、世代を超えた仲間との出会いがある!

全国から来た生徒、地元から進学した生徒、地域住民の方々など、様々な人々との出会いがあります。多くの地域には高校と地域を結ぶコーディネーターがいるため、地域と交流しやすい環境です。

ここでしかできない挑戦がある!

自然環境や伝統芸能に特化した部活動や、地域の特色を活かした課題発見解決学習やキャリア教育等、挑戦できる環境と失敗を温かく受け入れている仲間がそこにはあります。

本物の自然や文化にふれる!

都会にない美しい海、山、川。旬の食べ物、きれいな空気、静かな環境、地域ならではの文化や豊かな人間関係の中で感性が磨かれ、人間力が高まる高校3年間を送れます。

地域が見守る安心な環境で自律した生活ができる!

学校の先生だけでなく、地域住民の方も生徒の顔と名前を知っていることが多く、安心して暮らせる環境です。寮やホームステイでの生活を通して、思いやり、協働力、自律心や行動力が身につきます。

少人数教育で全員が主役!

一学級の人数が少ない分、役割をもつ機会が多くなり一人ひとりが主役に。自信、向上心、好奇心が生まれ、コミュニケーション能力も高まります。

都会や海外に比べて少ない費用!

一ヶ月の生活費は寮等込みで1万円~6万円程度。都会の物価水準や海外留学と比較しても、ローコストで生活できる環境が整っています。

地域みらい留学フェスタ2019開催概要

大阪	福岡	東京	名古屋
6月22日(土)	6月23日(日)	6月29日(土)	6月30日(日)
315組	61組	623組	109組
618名	136名	1,122名	217名

フェスタ内容

●地域みらい留学オリエンテーション

地域みらい留学フェスタに来場くださる方は、初めて地域みらい留学について聞く方から、既に志望校が決まっている方まで、理解度はさまざま。
まずは「地域みらい留学とは？」を知っていただくために、概要・魅力・留学にむけての進め方などを地域みらい留学事務局から説明します。その後は、パンフレットで、気になる高校・キーワードを見つける時間。心の準備ができたら、いよいよ全国の地域の学校と出逢う時間がはじまります！

●全国から55校！地域の学校説明ブース

北海道から沖縄まで、全国26道県55校の高校が1校ずつブースでじっくり高校のことを聞くことができるチャンス。豊かな自然を体感してもらうために鮮やかな写真や映像で説明する学校・生徒のリアルな声を届けるためにテレビ会議で高校につなぐ学校・地域で学ぶ楽しさや成長実感に触れてもらうために高校生が自らプレゼンテーションをする学校など、それぞれ創意工夫しながら「地域みらい留学」を知ってもらう機会になりました。

●「生徒が語る地域みらい留学」「保護者が語る地域みらい留学」セミナー

「新しい選択肢ゆえに、経験者になかなか会うことが出来ない」
そんな悩みを解決するために、都会から様々な地域へ留学した在校生・卒業生・保護者を迎えたトークセッションを実施しました。進学理由、実際の高校生活・寮生活、卒業後の未来の話をそれぞれ語る時間。感じたギャップなども赤裸々に話しつつ「それでも地域みらい留学でよかった」とまっすぐ語る生徒・卒業生・保護者の姿に、聞き入っている参加者の姿が印象的でした。

●特別対談「令和時代を生きる君たちへ」スポーツ界・留学界トップと語るこれからの時代の学びと生きる力

若者の留学を応援する国家プロジェクト「トビタテ！留学JAPAN」船橋力氏と、元リクルートエージェント社長で現Jリーグチェアマンの村井満氏をお招きし、「業界問わず必要とされる令和時代の学びと生きる力とは？」をテーマに特別対談を開催。自身の失敗体験や家族との向き合い方などプライベートな話も織り交ぜながら進行した対談では、地域みらい留学という選択に閉じずに、これからの時代の親のあり方について考えさせられる時間になりました。

●地域みらい留学生による「第１回　地域みらい留学生交流会」

現役地域みらい留学生で広島県立大崎海星高校3年生である細川さんの「折角フェスタで全国の高校生が集まる機会。一緒に挑戦して、想いを共有できるつながりができたらいいな」という想いから始まったこの企画。
参加者それぞれが持ってきた地域の名物お菓子が机に並び、交流会スタート！はじめは緊張している子もいましたが、ゲームなどを通じて、会場は笑い声でいっぱいに。後半は少人数にわかれてじっくりトーク。自分の好きなことや夢を共有していくうちに、住んでいる地域・年齢の壁を超えて、別れが名残惜しいほど熱いトークが繰り広げられていました。

地域みらい留学と同時開催で、地域みらい留学の参画校・
参画検討校向けの学びあいのワークショップも開催しました。

参加校向け
ワークショップ

●第一回地域みらい留学推進協議会「共学共創ワークショップ」

地域みらい留学は、2019年度から「地域みらい留学推進協議会」を設立し、全国の「地域みらい留学をきっかけに高校魅力化を推進していきたい」と考える高校関係者と共に、地域みらい留学の価値を高め、広める動きをしています。2019年度の地域みらい留学フェスタに関わった関係者は高校の校長先生/進路指導担当教諭/コーディネーター/自治体担当者/教育委員会担当者など、総勢390名。東京会場の開催後に、互いに学び合い共に未来をつくることを目的に第一回推進協議会「共学共創ワークショップ」を開催。
5テーマの挑戦事例（※）の分科会、協議会で取り組んでみたいことを考えたあとは、大懇親会。「違う土地で同じ志を持っている人と悩みを語り合うことで、まだまだできることがあると次のテーマが見つかり、自分が出来ないと思い込んでいたものの枠が外れた。勇気が湧くこのつながりを大事にしたい」と、地域・組織の枠を超えた新たな繋がりが生まれていた様子です。

※2019年度の挑戦事例
地域みらい留学に関わる挑戦事例。今年は、以下の高校/地域に事例発表をしていただきました。
・高知県立嶺北高校　「ブランディングとコミュニケーション～会いたい生徒にどうしたら魅力を感じて来てもらえるか～」
・島根県立津和野高校　「地域みらい留学が拓く新しい進路実現のあり方～いかに生徒へ寄りそうのか～」
・広島県立大崎海星高校　「地域みらい留学生の住環境の受け入れ体制～寮・下宿等のハード・ソフトをどう整えるか～」
・宮崎県立飯野高校　「地域を巻き込んだ授業づくり」
・協議会理事会校 校長代表から　「魅力化校の校長としての役割・チーム作り」

●地域・自治体のための「県外生徒募集ワークショップ」

地域みらい留学、そして地域みらい留学から始まる学校と地域の魅力化の取り組みに関心がある、高校関係者・都道府県教育委員会・市町村担当者が総勢50名がワークショップに参加しました。「島留学」を推進して道を切り開いてきた島根県立隠岐島前高等学校/隠岐学習センター長の豊田さんから「留学の取組を開始してから今までの葛藤」をお話いただき、自分の地域・学校はなぜ・どこまで覚悟を持って取り組むのか？を問い直す時間になりました。
＋感想

●地域みらい留学応援10,000人委員会設立発表会

地域みらい留学を持続的にかつ日本の当たり前の選択肢にしていくために、当初設立した「地域みらい留学応援100人委員会」から未来に向け、「地域みらい留学応援10，000人委員会」を設立し設立発表会を開催致しました。約50人の様々なセクターの方にご参加頂き、共同代表の岩本から3年間の魅力化プラットフォームの背景や今後、地域みらい留学事業責任者の尾田から地域みらい留学の今後の可能性についてお話させて頂きました。その後50人で地域みらい留学の今後の可能性を考える対話を行い、10,000人への一歩を踏み出しました。※10,000人応援委員会への参加はマンスリーサポーターへの加入が条件

数字で見る

地域みらい留学フェスタ2019

来場者編

来場者数
2,093名

昨年の約1.8**倍**の来場者にお越しいただきました。

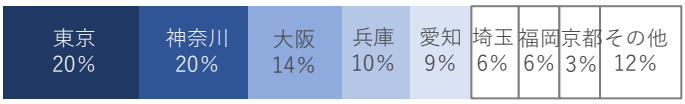
来場者の半数以上が中3と保護者の方で、遥々海外から地域みらい留学を検討するために来場くださった方も。63%の方が地域みらい留学を詳しく聞く機会は初めてでしたが、75%の方が留学を前向きに考えたいと回答いただきました。

参加者満足度は5段階評価で4.3、多様な選択肢との出会いと親身な相談の姿勢が嬉しかったというコメントが多く、特にリアルな声を聞くことが出来る「卒業生/保護者が語る地域みらい留学」が高評価でした。一方で、高校数が多いためもっと選びやすくしてほしいというお声もいただきました。

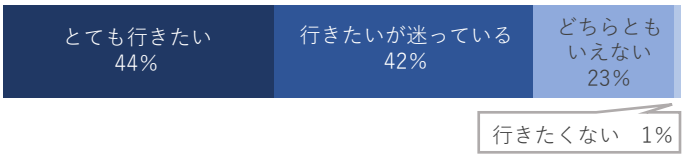
参加者満足度
4.3(5点満点)

●来場者分布

●来場者居住地



●参加後地域みらい留学への意欲



地域みらい留学校
島根県立隠岐島前高等学校
卒業生　前田 陽汰さん

Q.　地域みらい留学では、どんな学びや出会いがありましたか？

　僕の場合は進学動機が釣りだったので3年間釣り漬けの予定でしたが、進学してみたら釣り以上の楽しいことに出逢ってしまいました。島で生活する中で、畑や民宿の手伝いをさせてもらったり、船に乗せてもらって一緒に漁に行ったりしたことがすごく楽しくって、行く前に想像していた以上の楽しさがありました。

　特に寮生活での学びが大きく、全国から生徒が集まるなかでバックグラウンドも違うので日常生活の中でめちゃくちゃ価値観のぶつかり合いが起こるんです。それぞれのやりたいことや価値観を尊重しながらも寮を運営しなければならないという壁にぶつかったときに、初めて「マネジメント」という言葉に興味を持ち、本を読んだり勉強したりしました。自分の心の底からの学ぶ意欲に出逢ったのは寮生活があったからだったなあと思います。

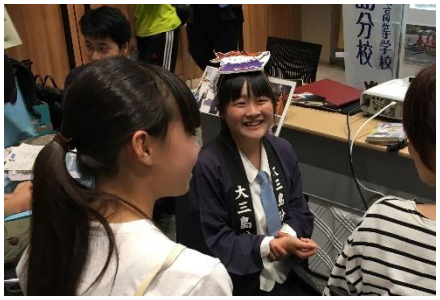
学校・自治体編

参画校数
26道県55校

昨年から21校増えて、全国55校・26道県の高校が参画しました。今年は、リアルな学校生活をイメージできるように現役高校生・自治体の方もタッグを組んで工夫する所も多く、総勢390名の学校関係者と一緒につくる「地域みらい留学フェスタ」となりました。

参加者満足度は5段階評価で4.1で「意欲高く前向きなお子さんとの出会いがあった」「自校の特色やPRを考え直す機会になった」とのコメントをいただきました。今後については、地域の学校間の高校生の交流機会や情報交換の機会が欲しいという声が多かったです。

参加校満足度
4.1（5点満点）



地域みらい留学　理事校
島根県立津和野高等学校
校長　熊谷 修山さん

Q.　地域みらい留学を取り組むことで、感じる価値・意義は？

津和野高校では、積極的な活動をする県外の生徒がいてくれることが、とても学校の刺激になっています。先日も、地元の生徒が「県外から来ている子が頑張っているから自分も頑張らねばと思った」とプロジェクトに手を挙げてくれたことが嬉しかったです。

また、地元に魅力と可能性を感じてくれる県外の生徒がいると知ることは、地元の子どもたちが地元の良さを再認識するきっかけにもなります。県外生・地元生ともに刺激しあって活動すること、そして、互いにやりたいことやなりたい姿を見つける高校3年間を送ってくれることを期待しています。

地域みらい留学に取り組むことで、生徒も間違いなく刺激を受け、教員も刺激を受けます。高校にとって大変意義があること、そして高校の可能性を拡げる機会だと感じています。

地域みらい留学フェスタ2019

地域みらい留学フェスタにむけた広報活動

●中学校へのチラシ配布/配布依頼

まずは中学生に地域みらい留学を広く知っていただくために、東京・神奈川・埼玉・千葉・大阪・兵庫・愛知・福岡・京都・北海道圏内の中学校全校に合計33万枚のチラシを送付し、その後、各校への配布依頼のお電話を掛けました。

●HP/WEB広告/SNSの運用

情報検索をして探す方に地域みらい留学の情報が届くように、HP情報の充実・大手WEBマーケティング会社オプトと協働した、SNS(Facebook/Twitter/Instagram)、検索エンジ等の広告運用を実施しました。

●進学フェア等のイベント出展

直接地域みらい留学を説明・PRする機会として、東京や大阪の進路説明会（ベネッセ進学フェア/埼玉東部進学フェア/神奈川県全公立展等）にてブース出展させていただき、そこで出逢った132名の方にフェスタにお越しいただきました。

地域みらい留学フェスタ2019のメディア掲載

2019年7月15日
東洋経済オンライン
「”地方の高校”にあえて進学する子どもの心情」

2019年7月9日
日経スタイル
「都会っ子が”地方公立校に留学”ブーム」

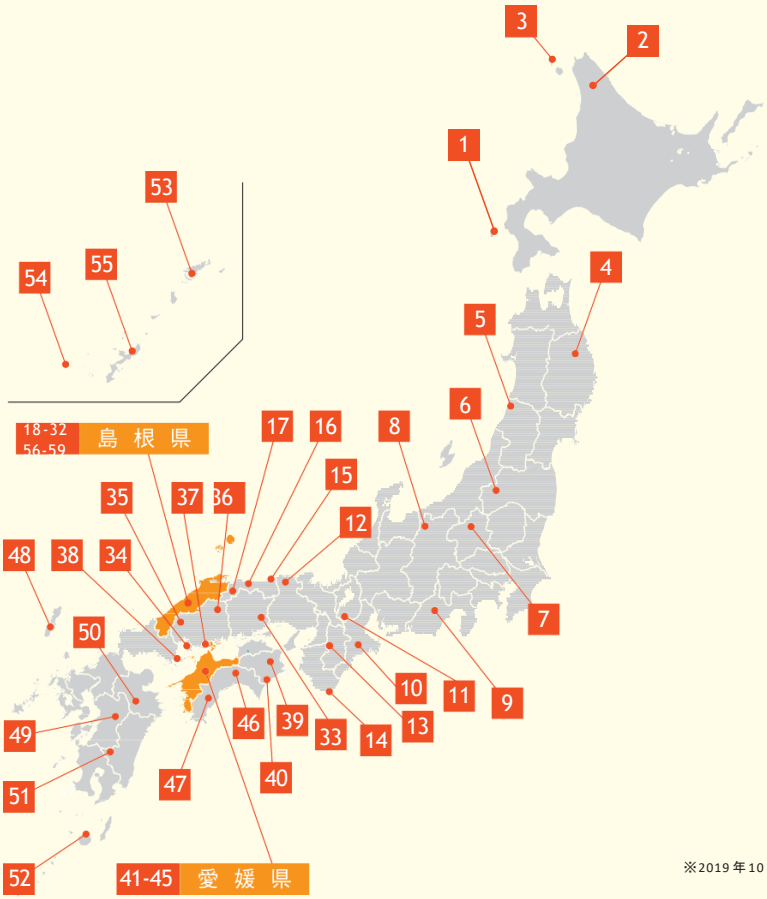
“親元を離れ地方の学校で学ぶ「地域留学」がいま人気。ただ地方に渡るだけではなく、最先端の教育を受けられるようになっている。”

2019年6月24日
NHK
「ニュース シブ5時」

学校情報

26道県59校が地域みらい留学を受け入れ！

魅力あふれる学校があなたを待っています。



※2019年10月現在

1	北海道	北海道奥尻高等学校
2	北海道	北海道おといねっぷ美術工芸高等学校
3	北海道	北海道礼文高等学校
4	岩手県	葛巻高等学校
5	山形県	遊佐高等学校
6	福島県	川口高等学校
7	群馬県	利根商業高等学校
8	長野県	白馬高等学校
9	静岡県	川根高等学校
10	三重県	昴学園高等学校
11	滋賀県	信楽高等学校
12	兵庫県	村岡高等学校
13	奈良県	五條高等学校賀名生分校
14	和歌山県	串本古座高等学校
15	鳥取県	岩美高等学校
16	鳥取県	倉吉農業高等学校
17	鳥取県	日野高等学校
18	島根県	情報科学高等学校
19	島根県	大東高等学校
20	島根県	三刀屋高等学校
21	島根県	横田高等学校
22	島根県	飯南高等学校
23	島根県	大田高等学校
24	島根県	島根中央高等学校
25	島根県	矢上高等学校
26	島根県	江津高等学校
27	島根県	浜田水産高等学校
28	島根県	吉賀高等学校
29	島根県	津和野高等学校
30	島根県	隠岐高等学校
31	島根県	隠岐島前高等学校
32	島根県	隠岐水産高等学校
33	岡山県	和気閑谷高等学校
34	広島県	大柿高等学校
35	広島県	加計高等学校
36	広島県	西城紫水高等学校
37	広島県	大崎海星高等学校
38	山口県	周防大島高等学校
39	徳島県	城西高等学校神山校
40	徳島県	海部高等学校
41	愛媛県	今治西高等学校伯方分校
42	愛媛県	今治北高等学校大三島分校
43	愛媛県	上浮穴高等学校
44	愛媛県	小田高等学校
45	愛媛県	三崎高等学校
46	高知県	嶺北高等学校
47	高知県	四万十高等学校
48	長崎県	対馬高等学校
49	熊本県	矢部高等学校
50	大分県	久住高原農業高等学校
51	宮崎県	飯野高等学校
52	鹿児島県	屋久島高等学校
53	鹿児島県	古仁屋高等学校
54	沖縄県	久米島高等学校
55	沖縄県	辺土名高等学校
<小中学校>		
56	島根県	知夫小中学校
57	島根県	西ノ島しまっこ留学
58	島根県	海士町親子島留学
59	島根県	大田市山村留学センター

地域みらい留学応援委員会

地域みらい留学を応援してくださる皆様からメッセージをいただきました。

＜有志＞

多様な日本を学び、未来のリーダーの階段を上ってほしい

衆議院議員
小泉 進次郎

私が学生の頃、よく父親から「日本にいたら日本のことはわからないぞ」と言われていました。最初はどういう意味かよくわからなかったけど、その言葉がずっと残っていて、気づいたら海外に目が向き、オーストラリアへホームステイ、アメリカでの大学院・就職をするに至りました。 そして、「日本にいたら日 本のことはわからない」という意味がわかりました。
高校生の皆さんには、ふるさとを出て、海外だけでなく、日本の地域課題最先端の地域で、都会とは違う多様な日本を学び、未来のリーダーの階段を上っていって欲しいと思います。

地域が育む人の夢

公益社団法人
日本プロサッカーリーグ（Ｊリーグ）チェアマン
村 井 満

Ｊリーグは今年開幕25 周年を迎えます。Ｊリーグがスタートする前の日本はワールドカップに出場するのが大きな夢であった訳ですが、Ｊリーグ発足後、現在では6 大会連続でワールドカップの出場を果たし、その夢を実現しています。そうした発展を下支えしたのは、選手が単身海外に飛び出して武者修行をしたことと無縁ではありません。自分の殻を破り世界を広げることが夢の実現には必要なのでしょう。また25 年前に10 クラブから始まったＪリーグですが、現在では全国38 都道府県に54 のクラブが活動をしています。「地域密着」というコンセプトを大切に歩んできた結果だと思っています。クラブに閉じただけでは発展に限りがあります。社会との連携こそお互いを大きく高めあっていくのだと思います。地域と一緒に人材を育成していくアプローチが今後日本全体に広がっていくことを願っています。

地域みらい留学を選ぶみなさんへの期待

一般社団法人ＲＣＦ 代表理事
藤 沢 烈

7 年間、東北復興に関わっています。そこで分かったのは、地元に仕事がないために若者が都市に出ざるを得ず、そのことが復興を妨げている現実でした。地元に貢献したい若者は多くいます。地域こそフロンティア（ 社会課題解決の最前線）であり、内容でも待遇でも誇りをもてる仕事が創れるのだと、ぜひ地域みらい留学は証明してほしいと考えています。地域にいれば成長するものではありません。地域みらい留学を選んだ若い皆さんは、自分が地域を変え、その結果として自分のキャリアも変えていくのだ、との想いをもって道を歩んでほしいと思います。

自分と地域の「関わりしろ」の多さこそ おもしろい

月刊『ソトコト』編集長
指出 一正

全国のさまざまな地域にうかがう中で、過疎地といわれる場所や、山間部のほとんど知られていないような土地でこそ、センスのある若者たちが、自分たちのやり方で、その地域を盛り上げようとしている例をたくさん見てきました。それは、地域においては都市部と異なり、コミュニティがばりばりに縛られず、自分と地域の「関わりしろ」がたくさんあるからだと思います。地域での高校生活を通して、地域の一員として、ぜひいろんなことにチャレンジし、自ら地域を変えていけるおもしろさ、楽しさを体感してみてください。

自然の中で身近な仲間と切磋琢磨し、世界とも繋がる新しい教育環境

株式会社コルク 代表取締役社長
佐渡島 庸平

今、ネットは世界中に繋がっている。ネットの中で世界中の人と繋がり、一緒に学ぶことができるので、様々な環境が子どもにとって刺激になりえる。目の前に自然が広がっていて、昔ながらのコミュニティがあり、そこで身近な仲間と切磋琢磨しながらも、世界と繋がり、トップの力を知る。そんな新しい教育環境を作ろうとしている人たち、それを作るのに自ら参加して協力しようとする人たち、両方の試みを応援したい。

21 世紀を生き抜く力を養う高校進学

文部科学大臣補佐官
東京大学 / 慶應義塾大学教授 日本サッカー協会理事
鈴 木 寛

21 世紀という複雑で不確定な激動の時代を生き抜く。それができるのは、想定外や板挟みと向き合い、乗り越えることのできる人材です。クリエイティブ・コラボレーティブに、AI では解けない課題に取り組む人材を育む教育環境として、社会課題の山積地で、世代を超えた人々と交流のある日本の地域はまさに、想定外や板挟みの経験を積むことができる場であると考えています。この地域みらい留学が、21 世紀を生き抜く力を養う高校進学の一つの選択肢としてスタンダードになることを願っています。

人が成長する３つの要素のすべてが地域に転がっている

トビタテ！ 留学JAPAN
プロジェクトディレクター
船 橋 力

～地域みらい留学～越境体験で、ジブンと出会い、ミライを知ろう
若いうちに地域に“留学”して学ぶこと、暮らすこと、新たな人と出会うことは、大きな人生の分岐点であり財産になること間違いありません。著名な経営コンサルタントの大前研一氏は、人が成長するには３つの大きな要素があると言います。
（1）住む場所を変える （2）時間配分を変える （3）出会う人を変える
地域にはそのすべてが転がっているのではないでしょうか？これからの不確実な時代で、イノベーションが必要だといわれます。イノベーションを生む源泉は、異質なモノのぶつかり合いと多様性の確保です。住む場所を変え、出会う人を変える異質なモノとのぶつかり合いことで、多様な価値観、自身の中の多様性も見出し、獲得し、さらに地域が抱える過疎や少子高齢化の課題のような課題先進国である日本が抱える、世界のミライの課題と解決策に触れることも出来るはずです。そして、何よりもそういった環境で、様々な驚き、違和感、問題意識が芽生えるでしょう。そんな非連続な時間、空間、出会いこそが、“留学”の醍醐味であると、私自身トビタテ！留学JAPAN の学生と触れる中で得た最大の実感です。ジブンが何に興味を持ち、ナニモノになりたいのか？地域、日本、世界、地球をどうしたいのか？自身にとっての問題意識、志、夢や近いミライの縮図に触れることで、ジブンのミライの地図をつくってもらう機会になればと思います。

本当に必要な教育は地域にある

NPO 法人ETIC. 代表理事
宮城 治男

興味をもってくれた中学生のみなさん、あなたはとてもセンスがありますよ。自信をもってください。保護者のみなさん、お子さんが挑戦に興味を持ってくれたとしたら、本当にラッキーだと思って下さい。私はこれまで多くの起業家や、各分野で、世界で活躍する若いリーダーを育ててきましたが、ただお勉強ができる子に育つことが、よい教育という時代は終わります。一方で地域には全人格的な成長を支えてくれる人の温かさ、自然の豊かさがあります。挑戦する勇気をもち、枠を踏み越えてくれるなら、その先に困難があっても、すべてかけがえのない成長に繋がります。それこそが本当に必要とされている教育、未来への投資となると、私は信じています。

リアルな変革の息吹を感じる体験

株式会社チェンジウェーブ 代表
佐々木 裕子

9 年間、変革屋として様々な変革の現場をみてきました。企業。行政。人。地域。学校。どこであっても、変革の最初の一歩は、ほんの数人の人たちが意思をもって集まり、熱量をもって、何かを解決していこうと動き始めることから始まります。わたしが様々な地域に関わり始めたのはここ数年ですが、「数人の熱い面白い人たち」が、これほどまでに地方に沢山いらっしゃるのか、と驚きます。そこにあるのは、手触り感のある「リアル」と人との繋がり。そして都会でないからこそ見える、もっと先にある「未来への希望」があるような気がします。日本という国の未来が、この多様性の中で創られていく。リアルな変革の息吹を感じる体験。私も沢山の方々とともに体感し、うねりを創る一翼を担っていきたいと思っています。

※掲載している情報は2018年６月時点のものです
。

地域みらい留学応援委員会

地域みらい留学を応援してくださる皆様からメッセージをいただきました。

＜生徒、卒業生、保護者＞

挫折しそうになったとき、親が一番サポートしてくれた

沖縄県立久米島高校１ 年生（神奈川県出身）

坪谷 梨菜

１ 地元ではない高校を選んだ理由
離島留学の高校が掲載されている雑誌を母親が見つけてきて、久米島高校の取組みを知りました。もともと人と違うことがしたいと思っていたので、離島留学に関心を持ち、最終的に他の離島と比べて久米島の方が環境が整っていることが決め手で久米島高校への進学を決断しました。
２ 高校生活で充実していること
園芸科に進学しましたが、普通の授業と比べて農業の授業が楽しいことです。苗の定植や液肥がけ、にわとりの解体など机でやる勉強ではなく、実際にやって学ぶことが多いことが気に入っています。放課後は学校で世話をしているやぎを見に行ったり、地元ではできない経験をしています。また、クラスメートの島の子と話すのも楽しいです。沖縄の文化や島特有の方言を教えて貰ったりしています。中学ではギターを弾いていましたが、今は三線を勉強し始めていて、最初は難しいと思いましたがだんだん慣れてきて楽しいと思えるようになってきました。
３ 入学前に悩んだこと
進学を決めて周囲に伝えると、学校や塾の先生に驚かれ心配や反対をされました。途中で挫折しそうになりましたが、親が一番サポートしてくれました。親は子どものやりたいことをやらすのが仕事だからと言って応援してくれました。

子ども時代に忘れてしまった大切な何かを取り戻す

島根県立飯南高校 在校生保護者

野田 香織

娘が「ここではないどこかへ」と言い出したのは中学２年の進路面談の時。最初は海外も希望していたのですが経済的な理由もあり、代わりに「しまね留学」はどう？と持ち掛けたところ即座にのってきました。夏休みを利用し学校見学。空気がおいしく、子どもたちも先生ものんびりとした雰囲気のある飯南高校を迷わず選びました。とはいえ、娘を送り出すのは本当に寂しくてつらかったです。そんな思いを跳ね返すかのように娘は入学早々からしまね生活を謳歌。地元のお友達もすぐにでき、見事に方言はうつり、東京生まれ・東京育ちとは思えない溶け込みっぷりです。毎日暗くなるまでバレーをしたり、鉄棒で逆上がりの練習をしたり、雪の日はそりすべりにかまくらつくり。なわとびで二重飛びができるようになったのは飯南高校に来たからだとおもいます。島根に行ったことで、子ども時代に忘れてしまった大切な何かを取り戻している、そんな気がしています。

入学してから仲間を大切にする気持ち をもつようになった

鹿児島県立古仁屋高校１ 年（埼玉県出身）

芳賀 博行

１．地元ではない高校を選んだ理由　どこの高校にもその高校独自の特徴があると思います。私は、違う県の離島の高校にはどのような特徴があるのか興味をもち、古仁屋高校に入学しました。地元の高校ではできないこと、例えば、奄美大島の八月踊りや加計呂麻ハーフマラソンなどにチャレンジしようと思っています。　２．高校生活で充実していること 私が在籍している学年は、生徒数が２８ 人で１ 学級しかありません。3 年間ずっと同じ仲間と高校生活を送ることになるので、クラス全員、仲間意識がとても強いと思います。私は、古仁屋高校に入学してから、仲間を大切にする気持ちをもつようになりました。一緒に遊んだり、勉強したり、部活動に取り組んだりして、高校生活を充実させています。　３．入学前に悩んだこと 私は、誰に対しても言いたいことを言ってしまう性格なので、それを受け入れてもらえるか、それでも友達ができるか不安でした。しかし、心配していたことが嘘のように、入学初日から多くの同級生に声を掛けられ、友達もたくさんできたので安心しました。

地域みらい留学で得られた能力

島根県立吉賀高校 在校生保護者

能美 兼司

愛知県から遠く離れた島根県の吉賀高校を希望することを決めた日は、彼が自分の力で人生をやってみようと決めた日でした。あれから二年が経ちました。この二年の間、彼は帰省するたびに、成長した姿を見せてくれました。あらためて、彼が、吉賀高校での経験から身につけたことは何か考えてみました。
1. 生活力＝日々の掃除、洗濯などの家事スキル 2. 金銭感覚 3. 学校以外の友 人、地域の大人とのコミュニケーション能力 4. 様々な問題を友人、先生方と 共に解決する問題解決能力 5. 進路を自己決定する能力 6. 自立心
いずれも、親から離れ、失敗しながらも、自分でなんとかしようと試行錯誤したことで得られた力なのだと考えています。これらの力は、この先社会に出た時、必ず必要な力になってくると思います。彼が、地域みらい留学で、楽しいことも大変なことも、様々たくさん経験し、充実した高校時代を過ごせているのは、安心した生活を支えてくださる先生方や地域の方々がいらっしゃるからです。心から感謝しております。

たった３年間という短い学校生活で人生が大きく変わるとは

島根県立津和野高校 卒業生

香川大学　教育学部　1年

槌林 寿音

私は、様々な進路の選択肢がある中、「地域みらい留学」で津和野高校への進学を選びました。不安でいっぱいで入学した県外の高校、まさかそこでのたった３年間という短い学校生活で私の人生が大きく変わるとは思ってもいませんでした。大阪府で生まれ育った私は、正直、「地域」との繋がりに関心がありませんでした。それは「地域」という言葉にあまり馴染みがない環境にいたからだと思います。しかし、いざ津和野町に行ってみると地域の方々との関りが多く、自分のやりたいことを応援してくれる環境がありました。例えば、私は自分の夢を見つけるべく、「地域」にある介護施設や小学校、養護学校などにインターンシップに行かせていただきました。また、道ですれ違う際には、笑顔で「こんにちは」という挨拶をし合う。そんな当たり前のこともそれまでの私にはできなかったことに思えます。環境を大きく変えて、また違った自分を見つけることができました。それが「地域みらい留学」での私の成長だと思います。

「わたし」を創りあげた島での３ 年間の経験

高知大学 地域協働学部 地域協働学科４ 年

古 川 森

生まれ育った千葉県を離れ、高校入学と同時に母と島へ移住しました。3 年間でどれだけの価値を得ることができたかは計り知れません。この島留学でたくさんの大人たちと対等に未来について対話した時間、生徒会長、体育祭団長、部活動立ち上げなど仲間と共にぶつかりながらも創造した時間、この3　年間の時間が、自分の人生か　ら真摯で愚直に、目を離すことのない「わたし」を創りあげたに違いありませ　ん。高校、大学で吸収した真価は、空間や場をつくる現場と個人の想いをつな ぐコミュニケーターとして発揮していきたいと思っています。

離れていても子どもの成長を感じることができる

島根県立隠岐島前高校 卒業生保護者

井出 祥子

「自分の夢を探しに行ってくる」そう言い残して、息子は隠岐島前高校へと旅立ちました。島内外のクラスメイト、高校の先生方、学習センターのスタッフの皆さん、そして島親さんをはじめとした多くの地域の方々に支えられ、「自分の夢を叶えるための入口が見えた！」と、息子が卒業時に笑顔で語ってくれたことが今でも忘れられません。考え方や価値観の基礎を形成する高校生という時期に、育ってきた環境の異なるクラスメイトや多種多様な大人と出会うことは、社会で生きていくうえでの大きな一歩となります。離れていても子どもの成長を感じることができる地域みらい留学を、たくさんの方々に知っていただきたいと思います。

経験が自信となり、行動を起こす際の原動力となる

立命館大学 政策科学部 政策科学科１ 年

三輪 知寛

宮崎を盛り上げたい。そのためにまちづくりを学びたいと思ったのが、中学３ 年の秋でした。4 ヶ月後には宮崎を飛び出し、島根県の離島にいました。島では、自分からインターン シップをしたり、お手伝いをして、多くの人と出会う中で、まちづくりのこと はもちろんですが、その他にもいろんな学びがありました。今、大学に入り、い ろんな大人の方から声をかけられたり、ご依頼がやってくるのは、高校で島留学（地域みらい留学）をしたからだと思います。中学３ 年生の時点で家を飛び出 し、高校生活、誰も知らないところで生活していたという経験は、のちのち大 きな自信となり、何か行動を起こす際の原動力になると思います。最後に飛び出す後輩たちが増えることを願っています。

人見知りだった自分を変えた「地域留学」というきっかけ

佐賀大学 芸術地デザイン学部
地域デザイン学科 地域デザインコース３ 年

白石 真巳

私は元々、人見知りで引っ込み思案でした。そんな自分を変えたいけれど何かきっかけが欲しい、そんな時に出会ったのが「島留学」でした。人口が少ない小さな島は、一人ひとりが持つ個性が活きる環境である反面、育ってきた環境や価値観の違いを直に感じる環境でもあります。実際、悩むことも多くありましたが、悩んだからこそ自分自身を深く見つめたり、他人と真に向き合うことができました。自分の生まれ育った地域から一歩出ることはとても勇気がいりますが、そこで得る経験はかけがえのないものになると思います。自分を変えたいというみなさんに、「地域留学」という選択肢を知っていただけると嬉しいです。

地域みらい留学フェスタ2019　開催レポート

～　高校生・大学生編　～

高校3年間、住み慣れた町を離れて、様々な地域に「留学」する取り組みが全国に広がりつつある。
中学時代までとは別の地域の高校へと留学している生徒の数は現在、約350人。
「地域みらい留学」と呼ばれる取り組みに、26都道府県から55の高校が参加する。

だが、高校時代に「わざわざ地域へ留学する」のはなぜか。
地域に留学することを通じて得られる力とは？そんな疑問に答えるイベント「地域みらい留学フェスタ2019」が6月29日、東京・渋谷で開催された。

「地域に留学する」。その選択を正解にするために、必要な覚悟とは。（取材・文：千葉 雄登）

色々な大人と出会い、関わることで「自分の言葉で喋れる」ように

「地域みらい留学フェスタ」を主催する「地域・教育魅力化プラットフォーム」の代表・水谷智之さんはこのイベントを「学校を見るだけでなく、自分の人生の選択、自分の人生を考える時間として使ってほしい」と呼びかけた。
留学した先では時に理不尽なことも起きる。そうしたことも乗り越えられるのは、自分で高校時代の3年間を地域で過ごすと決めた人だと強調する。

東京都出身で現在、広島県立大崎海星高校に通っている細川真住さんは、小学5～6年生のとき山村留学生として甑島で過ごした。その後、中学校は地元の学校へ通ったが、高校で再び地域へ飛び出すことを決める。進学先を選ぶにあたって複数の高校を見学したと明かす。

『今通っている大崎海星高校だけでなく沖縄の久米島高校や岩手の葛巻高校も見学させてもらいました。高校にも自分と合う・合わないという相性があると思うんです、3つの高校を見学した上で、私は海の近くで学びたいなと思い今の高校を選びました。』

一部の高校に人気が集中しやすい側面もある。だが、誰かにとって良い選択が必ずしも自分にとって良い選択だとは限らない。

大崎海星高校は1学年1クラス。クラス替えが3年間ないことへの戸惑いも当初はあった。だが、今では3年間を通じた結束力の強さを実感していると笑顔で語った。

大崎海星高校に進学することによって、どのような変化が生まれたのだろうか。

『大崎海星高校と、高校がある大崎上島の魅力を、島内はもちろん島外へと発信する＜みりょく郵便局＞という部活に所属しています。そこでは島について、高校についてプレゼンをさせていただく機会が多いんです。
もともと人前で話すことは嫌いではありません。でも、この3年間を通じて自分の言葉で喋ることができるようになったと感じています。』

島に来るまで、身の回りにいる大人は親か先生だけだった。だが、島で寮生活を送る中で関わる大人は実に多様だ。様々な大人たちが高校生のやりたいことを応援し、支えてくれる環境がそこにはある。

『色々な人の話を聞くことで、様々な職業を知ることもできますし、何より自分の考えが深まりました。価値観が広がったと感じます。迷った時は大人の人に相談して、意見を聞くようになりましたね。』

細川さんは間もなく受験を控えている。大学受験をすることは島へ留学した時点で父親と約束していた。島での経験が進路を選ぶ上で1つの指針となっている。

『まだ学部選びは迷っていますが、せっかくなので地域に関わることのできる学部で学べたら。あとは高校でニュージーランドに2週間、セブ島に1ヶ月留学させてもらうこともできたので大学生活の中でも海外へいくことができたらと考えています。』

「受け身でいては何も起きない」。その気付きが、自分を変えた。

（写真右が前田さん）

『地域みらい留学は一つの選択肢としてすごくありだと思うんですよ。でも、行っただけで何かあるわけではない。なぜ行きたいのか、ということを考えた上で選ばないと充実した時間を過ごせなくなってしまう、とも思います。』

こう語るのは、今年の3月に島根県立隠岐島前高校を卒業し、慶応義塾大学へ進学した前田陽汰さんだ。海士町という地域活性化が盛んな地域で3年間を過ごした今、島を存続させていくために、活性化以外のアプローチを示すことができないかと考えている。

もともと島への留学を考えたきっかけは、大好きな釣りが存分にできる環境だったから。周囲を海に囲まれた高校を探し、隠岐島前高校を見つけた。

実際に島へ足を運び、島のアットホームな雰囲気にも魅了された。進学後は釣りだけでなく、畑の手伝いや民宿の手伝いなど想像以上に様々な経験を積むことができたと振り返る。

地域を歩いて誰かに話しかければ、二言目には「お茶でも飲んでって」「にーちゃん、（畑仕事）手伝って」という言葉が飛び出す。気付けば、島の民宿の手伝いや漁の手伝い、米作りの手伝い…と様々な体験を積んでいた。
そこには行く前に地域へ留学することに対して抱いていたイメージと「良い意味でギャップがあった」。

特に大きな影響を受けたのは寮生活だ。

『全国、色々な場所から人が集まっている。だから寮での生活は楽しかったですね。友達というよりも、寮の仲間、一つ屋根の下で暮らす家族という距離感で。
寮長をやっていたんですけど、価値観がぶつかることもしょっちゅう起こるんです。「俺はこうしたい」「いや、僕はこうしたい」みたいなどうしようもないことばかりで（笑）。
みんなが生活しやすいように、どうしたらいいのかを真剣に考えるきっかけになった体験でした。』

前田さんは、決して積極的なタイプではなかったという。だが、あえて寮長を務めることを選んだ。その理由とは？

『島に行くと、受け身でいては何も起きないと気付いたからですね。受け身でいると、ただ時間だけが過ぎていってしまう。でも、何かをやろうとすれば、すぐにできる環境でもあるんです。
やりたいことの種があらゆるところに蒔かれているような環境だったからこそ、チャレンジしてみようと思ったのかもしれません。』

「地域みらい留学」をする、という選択の先に待ち受けているのは決して「素敵な竜宮城」ではないのだと水谷さんも強調する。地域みらい留学をしたからといって、すぐに何かが手に入るわけではない。
だが手を伸ばせば自分を成長させてくれる体験で溢れた環境が、地域には広がっている。だからこそ、まずは自分で納得のいく選択をすることが何よりも重要だ。

地域みらい留学フェスタ2019　開催レポート

～　保護者編　～

高校時代に「わざわざ地域へ留学する」のはなぜか。地域に留学することを通じて得られる力とは？そんな疑問に答えるイベント「地域みらい留学フェスタ2019」が6月29日、東京・渋谷で開催された。

今年、初めて企画された保護者たちのトークセッション。ある保護者は、自分は子育てに「執着していた」と明かす。語られたのは、学校のパンフレットだけではうかがい知ることのできない、子どもを送り出す側の本音だった。（取材・文：千葉 雄登）

最初は保護者の興味。息子が隠岐島前高校に入学するまで

現在、高校3年生の長男が島根県立隠岐島前高校に通う應手さんは島留学の存在を友達夫婦を通じて知った。

息子にホームページを見せたときの第一声は「島か、遠いな…」というもの。最初から乗り気というわけではなかった。

どちらかといえば、最初は保護者の方が強い興味を持っていたのも事実だ。
だが、都内で開催されていた「しまね留学」の説明会へ足を運び、そこで隠岐島前高校のプレゼンを聞いた。

『なんでかわからないけどワクワクするということで「オープンスクールくらいは行ってみない？」と勧めたところ、「まぁ行ってみるかな」と。そこから始まりました。』

実際に足を運んでみてわかることがある、と應手さんは強調する。だが、夏休みを終わった途端、息子は現実へと引き戻されていった。

『夏休みが終わってみると現実に引き戻されるので、「やっぱり俺、無理かも」とか、「あんな意識高い子の中でやっていける自信がない」とかネガティブ発言がはじまるんですね。2学期は保護者の私も相当応援しました。メンタル面では割と二人三脚でサポートしたような感じですね』

「もうやめる？」と息子に問いかけたこともあったと振り返る。だが、本人も隠岐島前高校への興味を捨てきれず、最終的には受験に挑戦することを決める。評定を上げる努力に、受験に向けた勉強。なんとか乗り越え入学することができた。

ふとした時に気付いた子どもの成長とは？

受験のために1週間ほど前乗りで隠岐へ渡っただけで、一回り大きく成長して帰ってきた息子の姿を目にして高校生活への期待は俄然高まった。だが、そんな期待をよそに高校生活が始まってからというもの、應手さんは息子の成長を「実感できずにいた」と明かす。
『入学してから「あれ？成長してないな、この子」ってこともあったんです。「島前高校っていいのかな？」って言っていた。「なんなんだろう？」って口を曲げながら』

だが、あることをきっかけに息子の成長を実感することになる。それは高校1年生の冬休み、帰省していた息子と一緒に、島留学を検討していた池本さん親子と話した日のことだ。

そこで應手さんは率直に、この1年での成長を実感できていないという本音を口にした。だが、その話を思わぬ形で息子に遮られた。

『マシンガントークを遮られたのがはじめてだったんですよ、息子に。「かあさん、いま俺の話だから」って。「俺の通っている学校の話だからちょっと待って」って。
そんなこと初めての経験だったから、その時に息子の成長を感じました。息子のことをまぶしく思えたし、島前高校に行ってよかったんだって思いました。息子の成長を身近で目の当たりにすることができないので、こういった変化って日々の日常の中で埋もれていきますよね』

子どもと離れ自覚したのは、自分の子育てへの「執着」だった。

「地域みらい留学に参加すれば、うちの子は本当に変わりますか？」
「すごく優秀な子だから変わったんじゃないですか？」

ブースに立てば、そんな質問を多く投げかけられた。こうした質問をしたくなってしまう保護者の気持ちはよくわかる。だが、保護者たちが多く集まる会場で「変わるかどうかはわかりません」と應手さんはあえて断言する。それはなぜか？

『うちの子はどちらかといえば平均的な子どもです。成績表に2だって普通にある。だからこそ、保護者としては偏差値で輪切りにされた高校に行かせたくなかった。この子ならではの輝ける場所があるはずだと、そう信じて。
ずっと、私が連れて行ってあげる、あなたの可能性が引き出される場所を見つけてあげるという気持ちで子育てをしていたんです。隠岐島前高校の入学式が終わり、入寮式が終わった時に気付いたんですよ、「あ、私はとんでもないことをしていたんだ」って』

それまでは息子に自分の力で歩いて行ってほしいと願いながら、背中を押し続けていた。同じ景色を見ることができるのが何よりの喜びだった。だが、それは「ただの執着だった」と気付いた。

『実は息子からも「お母さんは家庭の中ではニートだよね」と言われていた。私の中では息子のために学校を選んだり、そうすることが喜びになっていたし、それが当たり前だと思っていたんです』

息子が隠岐島前高校に入学してから、自分も自分の人生を生きる時間が始まったのだと應手さんは語る。保護者が魅力的に生きることは子の成長と無関係ではない、とも。

『保護者が魅力的に人生を送っていると余裕が生まれます。余裕が生まれるといい意味で子どものことどうでもよくなってくるんですね、今は息子も「なんか母さんも楽しんでいるんだな」って思ってくれている』

それまでは子どもが歩く道を保護者である自分が切りひらき、手を引いていた。だが、息子が島根に行ったことを機に、そんな子育てからは卒業した。「雑草の中を自分の力で這ってでも進んで欲しい」と語る。そうして「自分の人生を生きてほしい」と。

『私は、地域みらい留学と出会ってから本当に人生が変わりました。だから、他の保護者さんも自分の子どもの力を信じていただきたい。地域に留学したところで広がるのは日常です。日常の積み重ねです。非日常が起きるのか、ミラクルが起きるのかなんてわかりません。けど、そういったことが長い人生の中で3年間あってもいいんじゃないかって思うんです』